勝川（かちがわ）遺跡

調査の経過

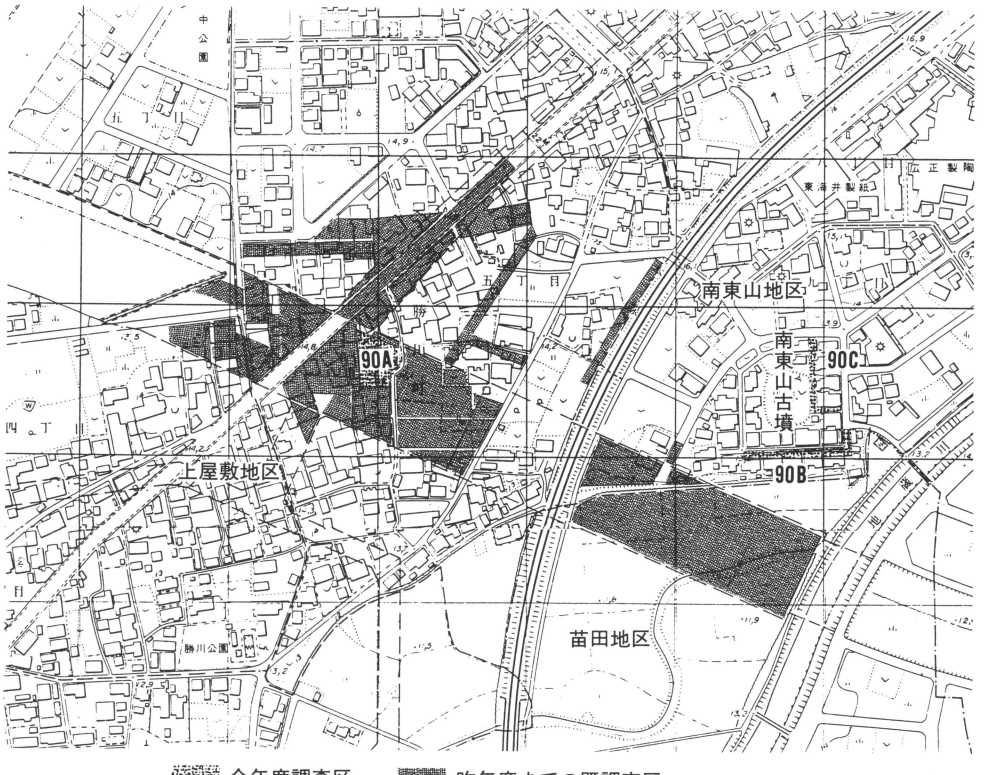
勝川遺跡は、春日井市勝川町に所在し、昭和56年より春日井市教育委員会、財団法人愛知県教育サービスセンター、財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって継続調査されている。その成果を元に、本遺跡の時期をⅠ期（弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期～古墳時代）、Ⅲ期（奈良時代～平安時代）、Ⅳ期（江戸時代）の４期に区別している。また、鳥居松段丘上西側を上屋敷地区、東側を南東山地区、段丘下を苗田地区としている。

調査の概要

今年度は90Ａ～Ｃ区の３調査区において調査を行った（第１図）。

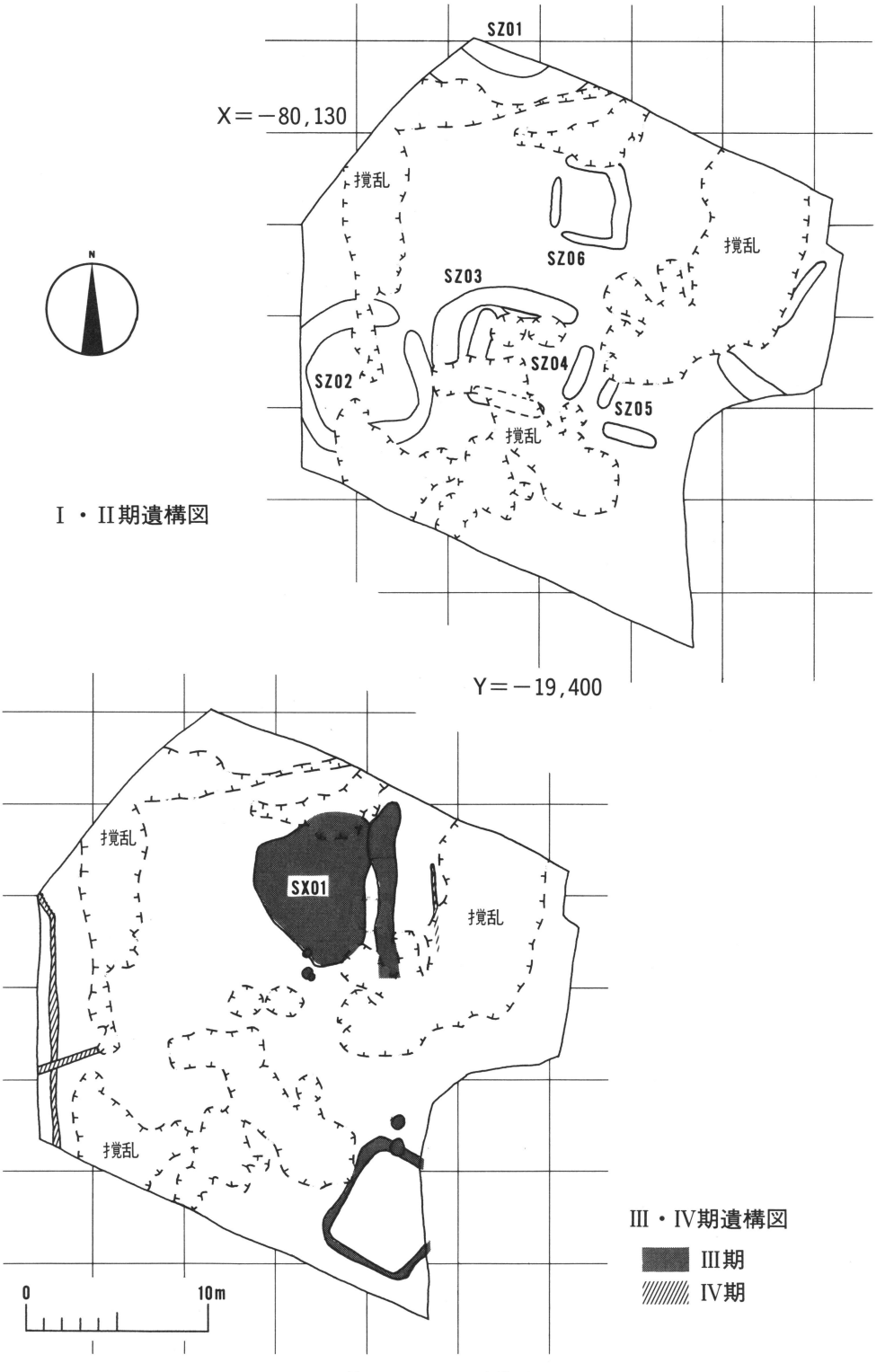
Ａ区　環状２号線建設に伴う事前調査として行った。上屋敷地区に含まれ、Ａ区の周囲はすでに調査を終了している。Ⅰ・Ⅱ期には方形周溝墓群を含む墓域が形成され、Ⅲ期には「勝川廃寺」の遺構、遺物がある。Ⅳ期の遺構は勝川宿に関係するものである。

Ａ区の現状は、攪乱が激しく、特に東側は部分的な攪乱のみならず全体的にも削られて



今年度調査区　昨年度までの既調査区

第１図　調査区位置図



I・II期遺構図

第2図　90A区遺構図

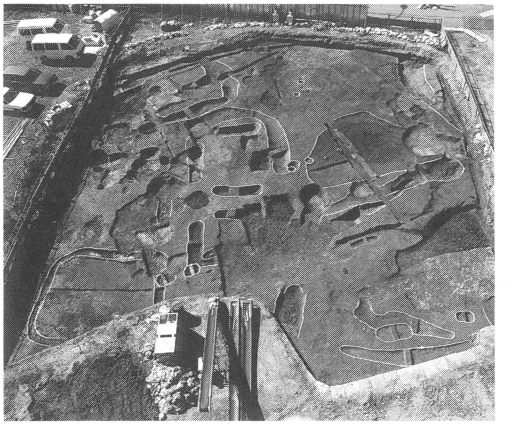
おり、遺構検出面である赤色粘土の残存状態は悪い。

Ⅰ・Ⅱ期の遺構として方形周溝墓６基、周溝墓の溝と思われるもの２条を検出した（第２図）。ただし、ＳＺ01・06を除き遺物は皆無である。ＳＺ03・04は東・南・北の溝が重複する。ＳＺ03は周溝の４隅が切れるタイプで、溝が埋まり切る前に西溝の外側に溝を掘り北溝とつなげる３隅の切れるタイプのＳＺ04を再築している。

Ⅲ期は「勝川廃寺」大溝の存在が推測されたが、その推定ラインに攪乱があり検出し得なかった。このラインの西側にＳＸ01がある。これは、長径8.7m、短径6.4m、深さ0.6mで、平面不定形の落ち込みである。下層にはほとんど遺物を含まず、炭化物層を挟んで上層には瓦を主とする遺物の投棄が見られる。下層に遺物がないことから廃棄土坑ではないが、その性格は不明である。

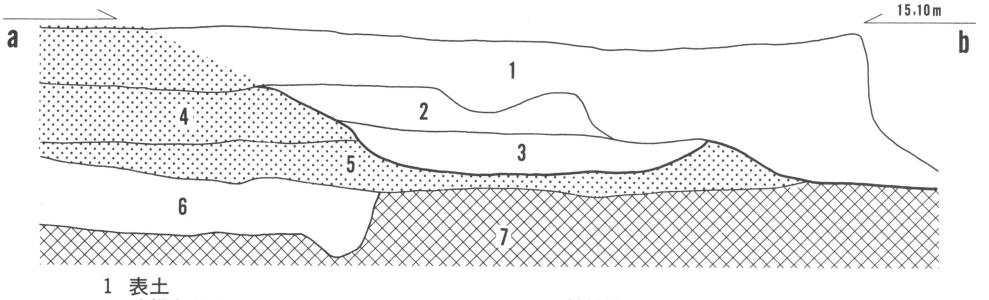
Ⅳ期は細い溝のみ検出した。

Ｂ区　Ｂ・Ｃ区は勝川土地区画整理事業の一貫として行われた。共に南東山地区に含まれるが、Ｂ区東側は段丘下に入る。Ｂ区



Ａ区全景

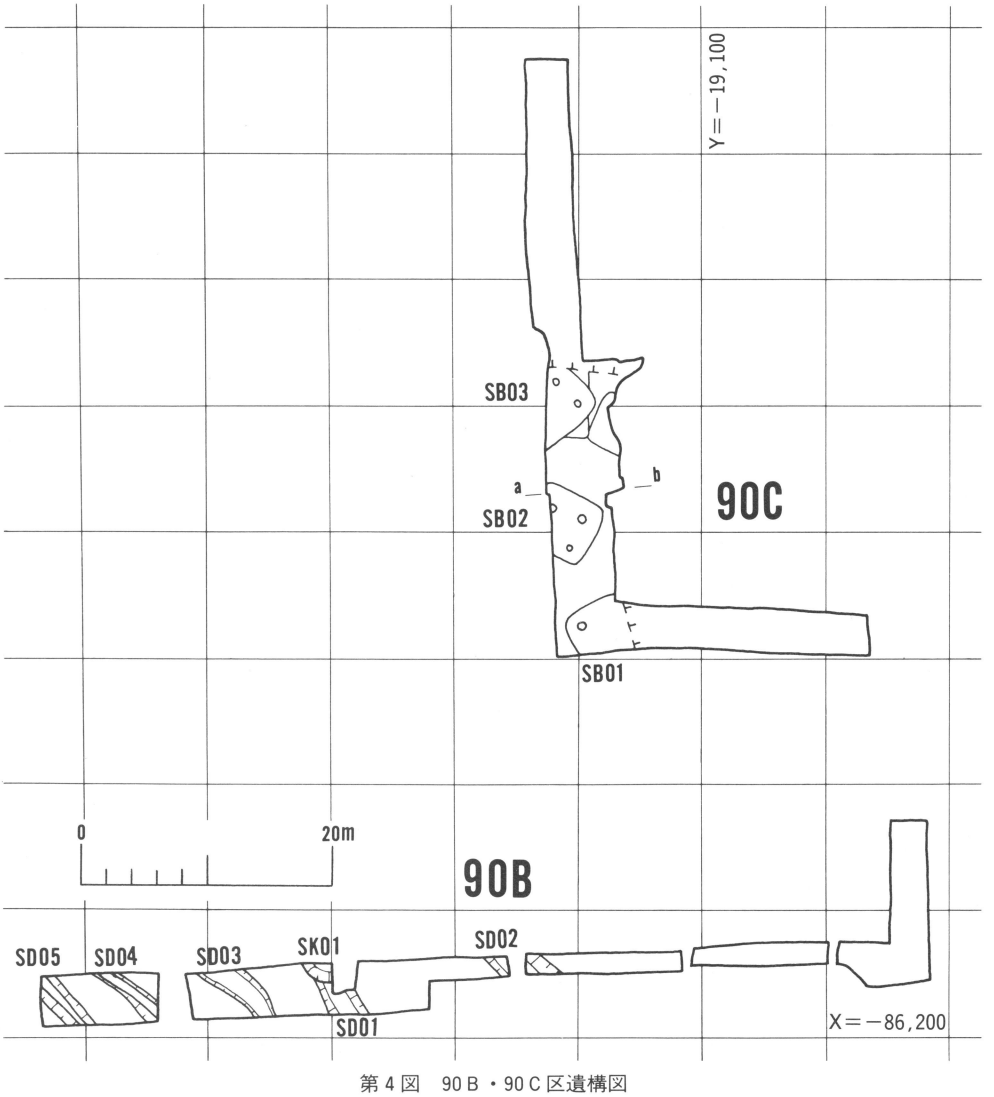
Ａ区　ＳＸ01　遺物出土状況



1　表土
2　暗褐色粘土
3　暗灰色粘土と淡黄色細砂の互層
4　SZ01盛土
5　暗灰褐色粘土
6　SB02埋土
7　地山

SZ01復元
鳥居松礫層

第３図　ＳＺ01　土層断面略図



第４図　90Ｂ・90Ｃ区遺構図

Ｂ区　ＳＤ05遺物出土状況

Ｂ区　ＳＫ01遺物出土状況

の幅は４ｍで調査区中央をガス管が縦断しており、遺構を平面的にとらえるのは困難な状況であった。

検出された遺構は全てＩ・II期に含まれ、そのうち目立つものは溝である（第４図）。溝は５条あり、すべて北西から南東に向いている。まとまった資料として、ＳＤ01とＳＫ01にＩ期、ＳＤ05にII期の遺物がある。ＳＤ01は幅2.9m、深さ0.6mで、中期中葉に比定される。ＳＤ05は幅1.8m、深さ0.9mで、極めて鋭角的な「Ｖ」字掘りで、出土遺物に広口壺の完形品があり、その胴部に穿孔が見られることから周溝墓の溝である可能性も考えられる。古墳時代初頭にあたる。ＳＫ01は一部分検出したのみで全体の規模はわからないが、中期中葉の遺物が大量に廃棄されており良好な資料といえる。調査区東側は鳥居松礫層が深く落ち込み、その上に粗砂が厚く堆積する。

Ｃ区　南東山地区中央にある「南東山古墳」の残存する墳丘東端を中心に「Ｌ」字状をなす調査区である。遺構は墳丘部分にのみ存在し、その北側及び東側は深く削られている。

上面はいわゆる「南東山古墳」で墳丘東斜面を検出した（ＩＫＫ　ＳＺ01）（第３図）が、墳丘上が現在畑となっており攪拌されているため、盛土は最厚でも30cm程度残っているのみで、墳形自体を推し計るまでには至らなかった。ただ、東斜面に沿って幅2.0m、深さ0.2mの浅い溝があり（第４層）、ＳＺ01の地山である第５層を掘り込んでいることから、以前の報告で墳丘東側が開発により削られたとするような事実は、少なくとも墳丘の形状を変えるまでには至っていないと考えられる。

下面はいわゆる「南東山遺跡」で、Ｉ・II期の遺構を検出している。主なものは竪穴住居で８棟検出しているが、調査区の幅が狭く全体像を把握できるものは少ない。

まとめ

今年度の調査に基づく問題点を上げてみたい。

90Ｂ区ＳＤ05は前述したように、周溝墓の可能性があるのだが、90Ｃ区の竪穴住居を含む居住域とはわずか40mしか離れていない。また、90Ｂ区の周辺で周溝墓に関係する遺構は出ていない。もし、ＳＤ05が周溝墓だとすれば単独で存在するのか、あるいは未調査部分に広がっているのか検討しなければならない。

今年度の調査を以て環状２号線関係の調査は終了し、土地区画整理事業関係の調査も区切りを迎えた。勝川遺跡の全体像を見つめ直し、改めて報告していく予定である。

（岡本直久）